

Title	台湾関係学術資料の保存・公開の意義と展開： フィールドノートのデジタルアーカイブ化を中心に
Sub Title	The significance and development of preserving and sharing academic materials related to Taiwan : focusing on the digital archiving of field notes
Author	宮岡, 真央子(Miyaoka, Maoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2025
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.154 (2025. 3) ,p.231- 252
JaLC DOI	
Abstract	During Japanese colonial rule in Taiwan (1895–1945), extensive research was conducted on the society, culture, and languages of Taiwan, providing critical foundational studies for later anthropological and linguistic research. Particularly notable are findings on Austronesian Indigenous peoples, today known as “Yuanzhumín / Yuanzhumínzú” (原住民/原住民族) , whose societies and cultures had underwent significant transformations since the colonial era. These studies captured invaluable historical records of cultures and languages, many of which have since been lost or transformed. Since the late 1990s, Japan has advanced digital archiving efforts to preserve and share academic materials. Among these, the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) at Tokyo University of Foreign Studies led a pivotal project to digitize and release Taiwanese academic materials collected by linguists Naoyoshi Ogawa and Erin Asai. In recent years, Similar initiatives, including the digitization of field notes by the Tokushima Prefectural Torii Ryūzō Memorial Museum, have followed. These digitized archives have not only fostered new research in anthropology and linguistics but also provided invaluable resources for Taiwan’s Indigenous communities, enabling them to reconnect with their cultural heritage.
Notes	特集：岡原正幸君・岡田あおい君・三尾裕子君退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000154-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

台湾関係学術資料の 保存・公開の意義と展開

——フィールドノートのデジタルアーカイブ化を中心に——

——宮 岡 真 央 子*——

The Significance and Development of Preserving and Sharing Academic Materials Related to Taiwan: Focusing on the Digital Archiving of Field Notes

Maoko Miyaoka

During Japanese colonial rule in Taiwan (1895–1945), extensive research was conducted on the society, culture, and languages of Taiwan, providing critical foundational studies for later anthropological and linguistic research. Particularly notable are findings on Austronesian Indigenous peoples, today known as “Yuanzhumin / Yuanzhuminzu” (原住民/原住民族), whose societies and cultures had underwent significant transformations since the colonial era. These studies captured invaluable historical records of cultures and languages, many of which have since been lost or transformed.

Since the late 1990s, Japan has advanced digital archiving efforts to preserve and share academic materials. Among these, the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) at Tokyo University of Foreign Studies led a pivotal project to digitize and release Taiwanese academic materials collected by linguists Naoyoshi Ogawa and Erin Asai. In recent years, Similar initiatives, including the digitization of field notes by the Tokushima Prefectural Torii Ryūzō Memorial Museum, have followed.

These digitized archives have not only fostered new research in anthropology

* 福岡大学人文学部教授

and linguistics but also provided invaluable resources for Taiwan's Indigenous communities, enabling them to reconnect with their cultural heritage.

はじめに

日本が台湾を植民地統治した 1895 年から 1945 年の半世紀間、台湾の自然や人や社会を対象とした調査と研究が、数多く行われた。とりわけ、現地に暮らす諸民族がそれぞれに用いる言語、多様な民族の日常を構成する社会制度や慣習法や生活様式などについては、異民族統治や開発・殖産の必要性から、そして学術上の関心から大いに注目された。なかでも、中国大陆からの漢民族系移民が到来するのに先立ち、そのはるか以前から台湾に暮らしてきたオーストロネシア語族系の先住諸民族「原住民／原住民族」¹ に関しては、日本にとって未知の民族であったがゆえに多くの視線と関心が注がれ、その記録や研究の蓄積も際立って多い。このような記録と研究の蓄積は、台湾をフィールドとする人類学や言語学の後続の研究者にとって、今日まで無視できない重要な先行研究として位置づけられている。

現在の台湾で、原住民人口は 60 万 9,170 人、台湾全人口 2,340 万 2,804 人のおよそ 2.6 % に相当し、政府には 16 民族が原住民族として承認されている（2024 年 10 月末現在）²。原住民は、17 世紀以降に漢民族が漸次増加するのにもない、文化的・社会的・政治的にマイノリティの地位、被支配者の立場におかれるようになった。そして、植民地化と近代化の過程において、為政者が促す同化政策のもと、社会・文化の著しい変化を余儀なくされてきた。それゆえに、19 世紀末から 20 世紀半ばまでの日本による植民地統治期に行われた原住民族の社会・文化・言語に関わる記録や研究蓄積には、その後に失われた、あるいは大きく変容した事象に関するものが数多く含まれ、貴重な価値をもつとみなされている。

日本においては、1990 年代後半以降、図書館、博物館、公文書館などが

所蔵資料をデジタル化し、そのコレクションを公開するデジタルアーカイブ化が推進されるようになった。日本の諸機関に所蔵される台湾に関係する過去の学術資料のデジタルアーカイブ化も、この潮流のなかで徐々に行われてきた。その先駆的な取り組みの一つが、2000 年代初頭に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、「AA 研」）において行われた、言語学者小川尚義と浅井恵倫が残した台湾関係学術資料の分類・整理・研究という一連の共同研究プロジェクト（以下、「小川・浅井資料プロジェクト」）である。そのなかでもフィールドノートをデジタルアーカイブとして整備する試みは、当時であって画期的であったと筆者は考える。そして近年、同様の取り組みは徳島県立鳥居龍蔵記念博物館によっても行われ、それを利用した研究も世に問われるようになりつつある。

本小文は、小川・浅井資料プロジェクトに焦点を当て、この取り組みを回顧し、台湾に関わる学術資料の保存と公開の意義およびその後の展開のあり方について、とくにフィールドノートのデジタル化に注目して考察することを目的とする。以下では、まず、日本における学術資料のデジタル化黎明期の動向について、小川・浅井資料プロジェクトに先立って行われた台湾関係資料に関わる取り組みをも取り上げながら概観する。次いで、小川・浅井資料プロジェクトの経緯や成果等について詳述する。そして、近年徳島県立鳥居龍蔵記念博物館においておこなわれたフィールドノートのデジタル化およびそれを用いた研究の動向に言及し、過去のフィールドノートが今日有する意義について、現地社会との関係という視点から考察する。

1. 資料のデジタル化の黎明期

1.1 デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブという用語は、馬場によれば「1990 年代に日本で生み出された和製英語である」という〔馬場 2012: 18〕。渡邊のごく簡潔

な説明を借りれば、デジタルアーカイブとは、「展示物等をデジタル化し保管したもの」である〔渡邊 2013: 154–155〕³。日本においてその推進役を果たしてきたのが、1996年に文化庁、通商産業省、自治省、産業界の支援のもとで発足した「デジタルアーカイブ推進協議会」(JDAA)である。2001年からは、国立公文書館・外務省外交史料館・防衛研究所の提供するアジア歴史資料のデジタル化データを公開する「アジア歴史資料センター」が開設された。続いて、2002年には国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」が、2005年には国立公文書館の「国立公文書館デジタルアーカイブ」の運用が次々に始まった〔加藤・宮本 2022: 16–17〕。JDAA発足後まもなくの時期に、当時東京大学総合研究博物館教授であったコンピューター科学者の坂村健は、資料をデジタル化し、アーカイブ化する意義を、「「本物」の有効利用を促進することでもあり、同時に「本物」の無用な利用を抑制することで「本物」を守ることにもつながる」と述べている〔坂村 1997: 4〕。デジタルアーカイブが登場した当初は、施設内に設置された端末で閲覧されるものであったが、2000年代に次々と開設された上記データベースのように、やがてウェブ上で公開されるものが主流となった〔渡邊 2013: 154–155〕。

1.2 鳥居龍蔵撮影写真資料の解析と公開

上述のような1990年代後半以降の日本におけるデジタルアーカイブ構築の組織的推進の動きに先立ち、1980年代後半、過去の台湾関係の学術資料についての整理と解析のプロジェクトがいち早く行われた。日本の人類学の黎明期にアジア各地や南米を踏査した人類学者鳥居龍蔵(1870–1953)が現地調査において撮影したガラス乾板写真の再生プロジェクトである。このガラス乾板は、長く東京大学理学部に所蔵され、後に同大学総合研究資料館(後の総合研究博物館)に移管されたもので、1988年から1990年にかけて2つの文部省科学研究費補助金に基づく共同研究が行われ⁴、ガ

ラス乾板の再生，そこに映された写真の現像と各地の専門家による被写体の解析，それらの成果を収めたカタログの刊行〔鳥居龍蔵写真資料研究会編 1990a, 1990b, 1990c, 1990d〕，そしてデータベース化が行われた⁵。また，同館では 1991 年に「乾板に刻まれた世界—鳥居龍蔵の見たアジア」と題する特別展も開催され，図録が刊行された〔東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編 1991〕。さらに 1993 年には，鳥居の写真資料を用いた特別展「鳥居龍蔵の見たアジア」が国立民族学博物館と徳島県立鳥居龍蔵記念博物館で開催された〔佐々木編 1993〕。

東京大学総合研究博物館が所蔵する鳥居の撮影とされるガラス乾板 1,859 点のうち，約 45 %にあたる 834 点は台湾で撮影されたものだった。そして，その鳥居撮影写真 1,859 点のなかから比較的画質のよい 812 点がカタログに収録されたが，台湾の写真はその約 8 割の 655 点を占めた〔鳥居龍蔵写真資料研究会編 1990a: 2-3, 11〕。これらは，鳥居龍蔵が 1986 年から 1990 年にかけて 4 度おこなった原住民調査で撮影したものである。これら鳥居の台湾写真については，さらに 1994 年に台北に位置する順益台湾原住民博物館で展示公開され，図録が刊行された〔宋文薫ほか 1994〕。鳥居の写真は，原住民を写し撮ったきわめて早い年代のコレクションの 1 つとして，台湾でも大きな話題を呼んだ。それ以後，日本統治期に残された学術資料に対して大きな関心が向けられるようになる。

この鳥居龍蔵が残した写真資料の再生プロジェクトから約 10 年後に着手されたのが，小川尚義と浅井恵倫が残した台湾資料に関する共同研究プロジェクトであった。

2. 小川尚義・浅井恵倫が残した台湾資料の整理と公開

2.1 小川尚義，浅井恵倫

小川尚義（1869-1947）と浅井恵倫（1895-1969）は，ともに日本統治期の台湾で調査研究に従事した言語学者である。以下，まず各々の評伝をも

とに、小川と浅井の経歴を概略する。

小川尚義は、東京帝国大学東京文科大学で言語学を修めた後、1896年に台湾総督府学務部編集事務嘱託として台湾に渡り、総督府国語学校教授などを経て、1928年に台北帝国大学文政学部に講師として着任、1930年に教授となった。台湾の漢語研究により『日台大辞典』（1907年）、『台日大辞典』（1931-1932年）、『新訂日台大辞典』（1938年）を編纂、台湾総督府から刊行し、台湾における漢語研究の礎を築いた。また、原住民族諸語の調査研究も手がけ、辞典『パイワン語集』（1930年）、『アタヤル語』（1931年）、『アミ語集』（1933年）を編纂し、台湾総督府から刊行した。1935年には、浅井恵倫との調査研究をもとに、台北帝国大学言語学研究室から『原語による台湾高砂族伝説集』を刊行、学士院恩賜賞を受賞した。翌1936年に台北帝国大学を退官し、故郷松山に戻った後も研究を続けたという〔以上、馬淵 1948〕。

浅井恵倫は、東京帝国大学文科大学を卒業後、1926年から大阪外国語学校に教授として着任した。その後には台湾の南東に位置する蘭嶼（当時の名称は紅頭嶼）で3度の調査を実施し、1936年にその研究をまとめた『ヤミ語の研究』でライデン大学において博士号を取得した。1927年には台湾中部の原住民族セデックの言語調査を行い、成果を発表している。上記『原語による台湾高砂族伝説集』が刊行された翌年、小川尚義の退官にともないその後任として台北帝国大学文政学部教授に着任した。終戦後2年弱の台湾での留用期間を経て、日本に帰還後はアメリカ駐留軍 CIE 顧問、国立国語研究所研究員を歴任後、1950年に金沢大学に講師として着任し、翌年に教授就任、1958年には南山大学の教授となった。没するまで南山大学に属し、多くの後続を育てたという〔以上、土田 2005〕。

2.2 小川尚義・浅井恵倫の残した台湾資料

小川尚義が台北帝国大学文政学部を退官後、その後任として浅井恵倫が着任したことは上述した。その後、浅井が日本に引き揚げる際に、浅井自身が収集した資料および小川が大学に残した資料を持ち帰った。そして浅井の没後、それらの資料を AA 研が引き継いだ。それが、AA 研所蔵の小川尚義・浅井恵倫の台湾資料である（以下、「小川・浅井資料」）。当該資料を AA 研が所蔵するに至った背景には、AA 研が国内唯一の言語学を専門とする国立の研究所であり、小川や浅井と同様にオーストロネシア語族の言語学を専門とする土田滋先生が当時 AA 研の所員として在籍し（その後、東京大学人文学部へ異動）、かつ浅井が AA 研の運営委員を務めていたという由縁があった [宮崎 2005]。

小川・浅井資料は、「台湾原住民関係の言語に関する貴重な一次資料（フィールドノート、語彙集等）約 400 点、22,000 を越える台湾原住民やインドネシア、中国大陸の民族写真、欧州旅行写真などのアルバムやフィルム、原稿、書簡、単語カード、約 40 枚の音声資料レコード、動画フィルム（8 ミリ、16 ミリ）、未発表の高砂族伝説集検索カード」に加え、「小川尚義教授のノート、さらに小川から引き継がれたと思われるそれ以前の時代の手書き資料（例えば伊能嘉矩のもの）」などで構成される [三尾 2005: 5]。そのなかには、小川尚義が収集したと推定される土地契約文書「新港文書」130 件あまりも含まれる。新港文書とは、清朝期から漢化が進んだ原住民（「平埔族」と総称される）のうち、台南に居住するシラヤが交わした土地契約書の総称である。小川・浅井資料のそれは、シラヤ語が用いられたものが過半を占める。転写本が多いとはいえ原本の所在が不明なものも含まれ、台湾史や言語学の研究において重要な史料と判断される [谷 2005]。このほかのフィールドノートや語彙集についても、すでに消失した、あるいは消失しかかった平埔族の言語に関する記録が多いことは、小川・浅井資料の大きな特徴である。

それらの資料の一部は、AA 研への移管後に土田滋をはじめとする幾人かの研究者によって参照され、多くの重要な研究に結実してきた⁶。また、1980 年代後半には、文部省科学研究費補助金のプロジェクトの一環として、浅井が残した音声資料と写真の一部について整理・分析が行われた⁷。この成果によって、浅井恵倫撮影の台湾原住民族の写真集〔笠原 1995〕が台湾で出版され、大きな話題を呼んだ。

しかしながら、従前の研究において、小川・浅井資料のなかで参照されてきたのは、膨大な資料群のごく一部にすぎなかった。また、資料のほとんどは長らく未整理のままに置かれてきた〔三尾 2005: 5〕。

2.3 小川・浅井資料プロジェクト

AA 研が北区巢鴨から府中市に移転する 2002 年を目前にして、当時 AA 研所員であった三尾裕子（現慶應義塾大学教授）と豊島正之（現上智大学名誉教授）が中心となり、2000 年度から AA 研において小川・浅井資料のデジタル化プロジェクトが開始された。またそれと平行し、所外から土田滋を研究代表者に据え、2000 年 10 月に AA 研の共同研究プロジェクト「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究」が発足し、台湾原住民族の言語学や人類学に携わる主だった研究者が共同研究員として参加することになった。筆者は三尾に研究指導を仰ぎ、ちょうどこの年の春から東京外国語大学大学院博士後期課程に在籍するようになったところであり、幸運にも声がけをいただき末席に加わった。この共同研究プロジェクトは、2003 年度末までの 3 年半にわたって行われた。その後の成果公開までを含めれば、さらに 2005 年まで活動を続けたことになる。

プロジェクトが始まってまもなくの研究会の席上、印象深い一幕があった。三尾が、小川・浅井資料の手稿、フィールドノートなどの膨大な紙資料を、一葉一葉すべてデジタル化するという AA 研のデジタル化プロジェクトを説明した際に、所外の研究者の 1 人から、「多くの人はまったく興味

を示さず、また読んでも意味がわからないような専門的な言語学のノートの全ページをすべてデジタル化することに、果たしてどれだけの意味があるのか」という旨の疑問が投げかけられた。その場には、少し当惑したような空気が漂ったと記憶する。しかし、三尾らはノートの各ページを含む全資料をデジタル化するという構想を堅持し、当初の計画通り実行した。

写真資料のデジタル化が完了してからは、毎回の研究会で主に写真の鑑定作業が進められた。浅井の写真には、日本各地や東南アジアやヨーロッパで撮影したものも多く含まれる。その大量の写真を閲覧し、「台湾原住民に関連する写真を選び出し、一点ずつ画像を確認してキャプション（画像説明）を付ける」という作業を行い、その数はおよそ 3,000 点に及んだ〔笠原 2005: 181〕。2000 年代初頭のこの鑑定作業において、「台湾原住民の生活環境が激変してしまった後に調査を始めた研究者が、画像だけから過去の光景について正確な判断を下すのは容易なことではな」く、「鑑定者によって解釈は一致せず、およそ見当がつかないという場合も少なく」かった〔笠原 2005: 184-185〕。しかし、ともかくこれらの写真の被写体が何で撮影地がどこであるのか、わかる限りの情報を個々の写真に付す作業が進められた⁸。

他方、小川と浅井が残したフィールドノート、語彙集、会話集など、言語調査の記録を中心とした文書資料は、主に李壬癸によって整理、分類、分析が進められた。李壬癸によれば、このプロジェクトに先立つ 1997 年、南山大学人類学研究所において浅井恵倫が残した資料が所蔵されていることが判明し、所長のクネヒト・ペトロから土田に相談があった。1999 年、李壬癸が AA 研を訪れて浅井・小川資料を調査した折に、土田滋とともに南山大学人類学研究所にも足を運んで同研究所が所蔵する浅井資料を調査したところ、それらのほとんどが小川尚義の言語研究資料であることが判明した〔李壬癸 2000: 3〕。後には、同資料中に AA 研所蔵資料との連番が付されたものがあるなど、双方の大きな関連性も明かとなった〔李

壬癸 2001: 13, 三尾・豊島編 2005: 131]. これら南山大学所蔵資料も含めた文書資料の精査については, 2001 年 7 月から 2004 年 6 月まで, 台湾の蒋経国国際学术交流基金会の研究助成により中央研究院歴史語言研究所, AA 研, 南山大学の国際共同研究として, 李壬癸を中心とした調査研究が実施された [三尾 2005: 6-7].

2.4 資料の公開とその後

このような約 4 年におよぶ複数のプロジェクトを経て, 2005 年 3 月には, 小川・浅井資料の南山大学所蔵分を含む全資料目録と, 資料の内容に関する分析や考察を収録した成果報告書『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』[三尾・豊島編 2005] が刊行された. そして, それらの電子データはひとたびデータベース上で公開された⁹. また, これに付随して台湾研究に関する二つの国際シンポジウムが開催され, 翌 4 月には AA 研を会場として, 小川・浅井資料を一般公開する展覧会「臺灣資料: テキスト・音・映像で見る台湾 〜一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」が開催された. この展覧会は, 同年 9-12 月には国立民族学博物館に場所を移し, 「臺灣資料展——一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」と題してふたたび行われた. また, 2005 年 7-8 月には, 台湾中部の原住民文化を主題としたテーマパーク「九族文化村」でも浅井撮影の写真の展示が行われた [三尾 2009a: 63].

以上の結果, 従前には未整理のままであった小川・浅井資料は, 「アーカイブ」と呼べるものとなった. コレクションがどのような種類のどのような資料から構成されるのか, その全体像が示され, 個々の資料についてもその概要が明らかになったのである. このプロジェクトに参加した平埔族研究を専門とする清水純は, これをもって, 「今後は各分野の個別の研究者がそれぞれの目的に応じて自由に研究に利用する段階に至った」と後に記した [清水 2014: 9]. そしてその成果は, まもなく現れた.

李壬癸は、豊島と共編で小川の残した比較語彙集を書籍にまとめ [李・豊島編 2006]、土田との共著でクヴァラン語の辞典を刊行し [李・土田 2006]、さらに浅井恵倫収集の言語調査データから、已に消滅した平埔族バサイ語トルビアワン方言の歌謡集を翻刻・刊行した [李 2014]。清水は、AA 研所蔵の浅井撮影写真と東京大学所蔵の鳥居龍蔵撮影写真資料を主たる資料とし、さらに台湾大学所蔵の浅井撮影写真資料などをも横断的に利用しながら、平埔族の歴史と文化を再構成する研究著作を刊行した [清水 2014]。また清水は、その後も AA 研およびその他の研究機関に所蔵される浅井資料に関する調査研究を続けている [清水 2017, 2018a, 2018b, 2020; 浅井 2018]。

他方、三尾は、AA 研と南山大学所蔵の小川が収集した文書資料のうち、領台初期に台湾総督府が示した原住民言語の調査方針の文書、および大正期に編纂された原住民統治の実務を担う警察官向けに編纂された原住民言語の教本を取り上げ、それぞれの年代における総督府による原住民統治の方針や原住民観などについて論じた [三尾 2009b, 2011]。三尾の研究は、小川が収集した資料を、小川自身の収集の意図とはまったく異なる視点からとらえ直し、考察したものである。このような研究は、研究者が収集した資料が、アーカイブ化という過程を経て、後世の研究者に利用・参照されるにあたり、従前のそれとは異なる新たな意味や意義を見いだされるものとして再生する、ということを如実に表している。

3. デジタルアーカイブを用いた研究の展開

3.1 フィールドノートのデジタルアーカイブ化

日本において、小川・浅井資料プロジェクトに先立って 1980 年代後半に行われた台湾関係の学術資料の整理・分析のプロジェクトは、前述したように、鳥居龍蔵撮影写真資料、および浅井恵倫の記録した音声・映像資料の一部が対象とされた。それに対して、上に詳述してきた AA 研におけ

る小川・浅井資料プロジェクトは、音声や映像資料も含まれてはいたものの、そのみならず、フィールドノートや調査カード、単語集など、膨大な手書きの紙資料をも対象に、全資料のデジタル化を行ったという点を大きな特徴とした。研究者個人が残した研究資料のアーカイブは国内の他の研究機関でも構築されているが、台湾関係の学術資料に関していえば、それらの全デジタル化まで完了させた例は、管見の限り他にはないと思われる¹⁰。

ところが近年国内で、台湾関係の学術資料について、AA 研の小川・浅井資料と同様に、フィールドノートをデジタル化するという例が他にも現れた。徳島県立鳥居龍蔵記念博物館による「鳥居龍蔵とその家族のノート」のデジタルアーカイブ構築と公開である。

3.2 鳥居龍蔵の台湾調査フィールドノートの研究

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館は、鳥居龍蔵の家族から引き継いだ資料を収蔵する。そのなかに、「鳥居龍蔵とその家族のノート」と分類される資料群、すなわち、鳥居龍蔵やその家族が調査地で作成したフィールドノート、日記などのノート類が存在する。同館はこれらをデジタル化し、2020 年 4 月からウェブでの順次公開を開始した¹¹。このデジタルアーカイブには、2024 年 10 月末現在 164 点の資料が公開されており、そのなかの 24 点が、鳥居龍蔵の台湾調査と明らかに直接関わるものである¹²。これらのフィールドノートを利用した研究も、近年行われるようになった。

清水純は、鳥居龍蔵の第 1 回台湾調査について、この時に記録されたフィールドノート 7 冊を解読することにより、行程と調査地の詳細を明らかにした [清水 2024]。筆者も近年、このデジタルアーカイブを利用した調査研究を進めている。これまでのところ、鳥居の台湾調査に協力した人々の関係やネットワークの広がりの方、従来不明な点が多かった第 5 回調査の経緯や具体的行程と調査内容、第 4 回調査で実施した原住

民族ソウに関する調査の具体的行程と内容などを明らかにしてきた〔宮岡 2020, 2021, 2023a, 2023b, 2024〕。

筆者はこれらの研究を通じて、鳥居のフィールドノートに記された情報の希少性と意義を再認識するとともに、鳥居のフィールドノートのアーカイブと写真資料など他のアーカイブとを横断的に照合することの有用性と必要性も実感してきた。すなわち、フィールドノートには、調査者が著作には記さなかった調査研究の断片的情報が多く含まれる。それらの情報は、他のアーカイブの諸資料との照合により、詳細かつ明確なものとなる。このような作業を通じて、フィールドノートが作成された調査の状況と、調査された社会・文化の当時の状況を、より立体的に復元し理解する道が開かれるのだと考える。

3.3 フィールドノートと現地社会

この鳥居龍蔵の台湾調査フィールドノートは、調査現場における手書きの記録であり、判読が容易ではない箇所も多い。そのため、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の研究者たちを中心としたノート講読会が近年定期的に行われ、筆者もこれに参加している¹³。講読会で判読・翻刻されたノートのテキストは、ある程度まとまった段階で、同館が国際共同研究を進める台湾の国立台湾史前文化博物館および同館分館の南科考古館の研究者らに共有される。同館の研究員には原住民出身の研究員が複数含まれ、またこれまで原住民コミュニティとの強固な協働関係を築いてきた。彼らは、その翻刻されたノートの講読会を定期的に関いて中国語に翻訳しながら内容の把握を進め、さらにその鳥居のフィールドノートを携えて、鳥居が調査に赴いた原住民族の村落を訪れ、鳥居の記録について聞き取り調査を複数回実施している。その成果の一部は、徳島で開催された国際シンポジウムでも報告された〔陳俊男ほか 2023〕。

今日の原住民族にとって、過去の研究者が残した記録は、自分たちの文

化や歴史を確認するための貴重な資源として受け止められている。もっともこのことは、植民地期の日本人研究者による調査研究の成果が、現地の人々にすべて無批判に受け止められているということを必ずしも意味しない。例えば、鳥居龍蔵が1897年の第2回台湾調査において蘭嶼で行った調査について、同島の子民族タオ出身の作家、シャマン・ラポガン（夏曼・藍波安）は、自身の祖先から聞いた伝承をもとに、鳥居のタオの人々に対する態度や調査方法の問題点について批判を述べている〔夏曼・藍波安 2021, 2023〕。ただし、そのような批判により、過去の記録そのものの価値がすべて否定されるというわけでもない。先のシャマン・ラポガンは、鳥居が蘭嶼に関する貴重な一次記録を残したことに感謝し、孤独と寂しさに耐えつつ探検を敢行したことに敬意を表してもいる〔夏曼・藍波安 2021: 83〕。また彼は、鳥居の蘭嶼における調査成果の中国語版刊行にも大きく関与している〔鳥居 2017〕。

つまり、過去のフィールドノートは、彼らが自らの祖先と出会い直し、自民族の文化的な遺産を知り、自らのアイデンティティを確認する機会を提供する。このような点に鑑みれば、原住民の人々が過去の記録そのものの、そしてその記録がなされた当時の状況をより詳細に知る手がかりとして、フィールドノートが開かれた形で参照できることは、重要な意味と意義をもつといえる。そして、資料そのものを守りつつより開かれた形での参照の場を提供するためには、デジタルアーカイブを通じた公開という方法が有効であることは、言を俟たないだろう。

4. おわりに

スミソニアン機構の国立人類学アーカイブの研究者であるレオポルドは、同アーカイブの公開により調査対象とされてきた先住民族の人々との連携を進めてきた。彼は、「フィールドノート」を先住民の研究者と共有することで、自分たちがコレクションについて多くを学んだ。一方、先住民

研究者たちは自らの文化遺産についてさらに多くを学んでいる」という。そして、公開されたフィールドノートのこのような状況を指して、「民族誌フィールドノートの第二の人生である」と述べる〔Leopold 2008: 8〕。

日本統治期に記録され収集された台湾に関する学術資料にも、同様のことが言えるであろう。フィールドノートは過去の研究者あるいはその後継である今日の研究者にとって有用であるだけでなく、調査対象とされてきた社会にとっても、さまざまに重要な意味を持つ。アーカイブ化により、フィールドノートは第二の人生を歩み始めるのである。

そのような点に早くから注目し、2000 年代初頭に膨大で複雑な構成をもつ小川・浅井資料の整理と分類のみならず、全資料のデジタル化を敢行した三尾と豊島の慧眼に、その恩恵を被る研究者の一人として敬服の念を抱く。小川・浅井資料が、今後も原住民族を含むさまざまな立場の人々によりさまざまな場で参照・利用されることを期待し、本小文を閉じたい。

付記：本小文の執筆にあたり、久しぶりに小川・浅井資料プロジェクトの目録等を読み返し、これを推進した三尾裕子先生の実に精力的なお仕事振りにあらためて驚嘆した。当時大学院生であった筆者は、自身のフィールドワークなどに傾注し、プロジェクトにはごく限られた範囲でしか参加できなかった。しかしそれでも、過去の資料が再生される現場に立ち会い、成果公開の展示やシンポジウムなどに参画できた経験は、自身の研究人生において大きな糧となり、今日に至る研究上の問題意識や動機にも大きな影響を与えてきた。これまでの三尾先生の筆者に対するご指導や忍耐に対してはもちろんのこと、このような得難い機会を少なからず与えてくださったご高配に対しても、この場をお借りし、あらためて衷心より深謝を申し上げたい。

註

- ¹ 台湾で 1980 年代後半から盛んになった先住民族の差別是正と権利回復を訴える社会運動において、為政者が名付けた従来の侮蔑的な、あるいは同化を志向する呼称を拒み、「台湾のもともとの住民」という意味をもつ「原住民」「原住民族」という総称を用いることを主張し、1990 年代にはこれが憲法にも記載され、公称となった。本稿ではこの経緯に鑑み、台湾の先住民の諸個人やその総体を指す場合には「原住民」、民族集団であることを含意する場合には「原住民族」という語を用いる。
- ² 中華国内政部戸政司 (<https://www.ris.gov.tw/app/portal/346>) 公表統計資料による (2024 年 11 月 22 日参照)。なお、本稿で後に述べる「平埔族」と呼ばれる諸民族は、清朝期以降に漢民族の生活様式を取り入れて清朝による統治に与した経緯から、日本統治期以来の法制度上で漢民族と同様の扱いをされてきた。それゆえ、その多くが今日政府に原住民としての法的地位を認められておらず、ゆえに上述の人口数にも含まれていない。ただし、2022 年に平埔族に原住民の身分を認めないことは違憲だとする司法判断が下され、近い将来その法的身分には変更が生じる見通しである。
- ³ デジタルアーカイブという用語は、1990 年代から 2020 年代にかけて、その含意を次第に変化させてきたという。その概念の変遷の詳細については [加藤 2022] 参照。
- ⁴ 総合研究 (A) 「鳥居龍蔵博士撮影の日本周辺諸民族写真・乾板の (緊急を要する) 再生・保存・照合」 (研究代表者: 香原志勢, 研究期間: 1988–1989 年度, 課題番号: 63300013), 重点領域研究「先史モンゴロイド集団の拡散と適応戦略」 (研究代表者: 赤澤威, 研究期間: 1990 年度, 課題番号: 02225103)。
- ⁵ 東京大学総合研究博物館「東アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース」 (https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/torii_catalogue/hajime.php), 2024 年 11 月 24 日閲覧。
- ⁶ 小川・浅井資料を用いた 2000 年代初頭までの研究成果については [三尾 2005: 9] を参照。なお、本稿で言及する研究者等の人名については、煩雑さを避けるため、本文中ではすべて敬称を省略する。非礼をご寛恕いただきたい。
- ⁷ 総合研究 (A) 「環シナ海・日本海諸民族の音声・映像資料の再生・解析」 (研究代表者: 朝倉利光, 研究期間: 1986–1987 年度, 課題番号: 61300002)。
- ⁸ 後述する成果報告書には、そのうち 531 点が紹介された [三尾・豊島編 2005]。
- ⁹ データベースはその数年後、ウェブ上での公開が停止され、現在に至る。ただし資料の電子データそのものは、AA 研の資料室で申請により閲覧することが可能である。
- ¹⁰ 例えば、国立民族学博物館の「民族学研究アーカイブズ」は、1930–40 年代に台湾原住民族の研究に従事した研究者の資料として、「馬淵東一アーカイブ」

「鹿野忠雄アーカイブ」を含む。この「民族学研究アーカイブズ」は、目下のところ目録のみをウェブで公開している (<https://nmearch.minpaku.ac.jp/>, 2024 年 11 月 30 日確認)。なお、台湾においては、デジタルアーカイブの構築が全般的に盛んであり、日本とは状況が大きく異なる。

- ¹¹ 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館デジタルアーカイブ (https://adeac.jp/tokushima-bunkanomori/top/topg/top_torii.html, 2024 年 10 月 30 日確認)。
- ¹² 台湾に関するノートは 25 点公開されているが、そのうち 1 点 (目録 ID: mp021070-200060) は、台湾総督府において林学分野の技師を担った小西成章 (1863-1909) のものとみなされる。筆者はこのノートの内容をまだ精査しておらず、現時点で、鳥居の台湾調査との関係は詳らかでない。
- ¹³ この講読会への参加は、文部科学省科学研究費補助金、基盤 (A)「民族誌アーカイブズとフィールド調査の接合による植民地初期台湾の先住民族社会の探究」(研究代表者：野林厚志, 2022-2027 年度, 課題番号：22H00040) における共同研究の一環である。

文献

浅井恵倫 (著), 清水純 (編)

2018 「シラヤ熟蕃研究断片」『台湾原住民研究』22: 116-129.

笠原政治 (編), 楊南郡 (訳)

1995 『台湾原住民族映像—浅井恵倫教授寫真集』台北：南天書局.

2005 「画像資料—概説」三尾裕子・豊島正之 (編)『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』181-189 頁, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

加藤諭

2022 「アーカイブの概念史」『デジタル時代のアーカイブ系譜学』, 26-48 頁, 東京：みすず書房.

加藤諭・宮本隆史

2022 「デジタル時代のアーカイブの諸系譜をたどるために」『デジタル時代のアーカイブ系譜学』, 3-23 頁, 東京：みすず書房.

坂村健

- 1997 「デジタルミュージアム—博物館の未来をめざして」『文化庁月報』(8)(347): 4-5.
- 佐々木高明(編)
- 1993 『鳥居龍蔵の見たアジア—民族学の先覚者』大阪: 国立民族学博物館.
- 清水純
- 2014 『画像が語る台湾原住民の歴史と文化—鳥居龍蔵・浅井恵倫撮影写真の探究』東京: 風響社.
- 2017 「1947年, 浅井コレクション渡米の経緯—アメリカ自然史博物館における台湾原住民収蔵品をめぐる一考察」『台湾原住民研究』21: 38-79.
- 2018a 「解説: 浅井恵倫著「シラヤ熟蕃研究断片」」『台湾原住民研究』22: 130-143.
- 2018b 「浅井恵倫収集資料に関する調査報告—台湾大学人類学博物館の収蔵品について」『台湾原住民研究』22: 164-172.
- 2020 「浅井資料中の英文書簡について—ジョージ・カーとの交流を中心に」『台湾原住民研究』24: 222-233.
- 2024 「鳥居龍蔵の第1回台湾調査ルート」『台湾原住民研究』28.
- 夏曼・藍波安(シャマン・ラポガン)
- 2021 「鳥居龍蔵 紅頭嶼佚事 老海人與人類學家的相遇」『薰風』15(1): 78-83.
- 2023 「附録一, 筆者補述「日本學者」與「驅除惡靈運動」」夏曼・藍波安・林嘉男『雅美族紅頭部落歷史研究』271-281頁, 南投: 國史館臺灣文獻館.
- 宋文薰ほか
- 1994 『跨越世紀の影像—鳥居龍蔵眼中的台灣原住民』台北: 順益台灣原住民博物館.

谷智子

- 2005 「浅井文庫「土地契約文書」データベース化作業報告」三尾裕子・豊島正之（編）『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』393-395 頁，東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

陳俊男・林慧仙・曾于宣

- 2023 「與鳥居龍藏共行—臺灣原住民族的發展及國立臺灣史前文化博物館的角色」徳島県立鳥居龍藏記念博物館（編）『国際シンポジウム「鳥居龍藏と台湾 資料の可能性を探る」講演要旨集』26-53 頁，徳島：徳島県立鳥居龍藏記念博物館。

土田滋

- 2005 「[[人と学問] 浅井恵倫」三尾裕子・豊島正之（編）『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』322-339 頁，東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（初出：1984『社会人類学年報』10: 1-28）。

東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会（編）

- 1991 『乾板に刻まれた世界—鳥居龍藏の見たアジア』東京：東京大学総合研究資料館。

鳥居龍藏（著），夏曼・藍波安（監修），李文茹・徐佩伶・楊智景（訳注）

- 2017 『紅頭嶼研究第一本文獻』台北：原住民族委員會。

鳥居龍藏写真資料研究会（編）

- 1990a 『東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍藏博士撮影 写真資料カタログ 第 1 部 解説』東京大学総合研究資料館標本資料報告第 18 号，東京：東京大学総合研究資料館。

- 1990b 『東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍藏博士撮影 写真資料カタログ 第 2 部 写真 台湾 1：ヤミ族 アミ族 プユマ族 パイワン族 ルカイ族』東京大学総合研究資料館標本資料報告第 19 号，東京：東京大学総合研究資料館。

1990c 『東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ 第3部 写真 台湾2: タイヤル族・セデック族 プヌン族 ツォウ族・カナカナブ族・サアロア族 サオ族 平埔族 漢族 その他』東京大学総合研究資料館標本資料報告第20号, 東京: 東京大学総合研究資料館.

1990d 『東京大学総合研究資料館所蔵 鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ 第4部 写真 満州 千島 沖縄 西南中国』東京大学総合研究資料館標本資料報告第21号, 東京: 東京大学総合研究資料館.

馬場章

2012 「知識創造に向けたデジタルアーカイブ」『アーカイブズ』46: 18-27.

馬淵東一

1948 「故小川尚義先生とインドネシア語研究」『民族学研究』13(2): 160-169.

三尾裕子

2005 「前言—小川・浅井資料とAA研」三尾裕子・豊島正之(編)『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』5-10頁, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

2009a 「台湾研究この10年: 台湾を対象とした人類学の発展過程」『日本台湾学会報』11: 57-65.

2009b 「「蕃語編纂方針」から見た日本統治初期における台湾原住民語調査」『日本台湾学会報』11: 155-176.

2011 「警察官用原住民語教科書に見える原住民へのまなざし」植野弘子・三尾裕子(編)『台湾における〈植民地〉経験—日本認識の生成・変容・断絶』259-299頁, 風響社.

三尾裕子・豊島正之(編)

- 2005 『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

宮岡真央子

- 2020 「台湾調査―第 1 回, 第 2 回を中心に」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館, 鳥居龍蔵を語る会 (編)『鳥居龍蔵の学問と世界』京都: 思文閣, 111-134 頁.
- 2021 「鳥居龍蔵の第 5 回台湾調査」『台湾原住民研究』25: 3-34.
- 2023a 「鳥居龍蔵と台湾―同志たちとの協働を中心に」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 (編)『国際シンポジウム「鳥居龍蔵と台湾―資料の可能性を探る―」講演要旨集』鳥居龍蔵がつなぐ台湾と徳島の文化交流事業実行委員会 (徳島県立鳥居龍蔵記念博物館内), 15-25 頁.
- 2023b 「鳥居龍蔵の台湾調査フィールドノート―1900 年阿里山行を中心とした予備的考察」『台湾原住民研究』27: 73-100.
- 2024 「鳥居龍蔵の台湾調査協力者, 高木隆次―デジタルアーカイブを活用した研究の一例」『台湾原住民研究』28.

宮崎恒二

- 2005 「緒言」三尾裕子・豊島正之 (編)『小川尚義浅井恵倫台湾資料研究』3 頁, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

李壬癸

- 2000 「南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料」(土田滋訳)『南山大学人類学研究所通信』8: 2-7.
- 2001 「南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料 (訂正と追加)」『南山大学人類学研究所通信』9: 10-14.

李壬癸・土田滋

- 2006 『噶瑪蘭語詞典』台北: 中央研究院.

李壬癸・豊島正之（編）

2006 『臺灣蕃語蒐録 by 小川尚義』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

李壬癸（編著），黄秀敏・劉彩秀（協助）

2014 『巴賽族社頭方言 傳説歌謡集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

渡邊英徳

2013 『データを紡いで社会につなぐーデジタルアーカイブのつくり方』講談社.

Leopold, Robert

2008 “The second life of ethnographic fieldnotes,” *Ateliers A & Ateliers LESC* [Online], 32: 1–9, connection on 10 October 2024. URL: <http://journals.openedition.org/atelierslesc/3132> ; DOI: <https://doi.org/10.4000/ateliers.3132>.

インターネット資料

国立民族学博物館「民族学研究アーカイブズ」：<https://nmearch.minpaku.ac.jp/>

中華民国内政部戸政司：<https://www.ris.gov.tw/app/portal/346>

東京大学総合研究博物館「東アジア・ミクロネシア古写真資料画像データベース」：https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/torii_catalogue/hajime.php

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館デジタルアーカイブ：https://adeac.jp/tokushima-bunkanomori/top/topg/top_torii.html